

## 湯浅譲二の創作における声の新しい役割と可能性

### —言語コミュニケーションを主題化した作品群の分析研究—

A New Role and Possibilities of Human Voice in Joji Yuasa's Creation :  
Analytical Studies of His Works Thematizing Linguistic Communication

中辻 小百合

#### 要旨

本研究は、湯浅譲二(Joji Yuasa, 1929-)による言語コミュニケーションの問題に関わる声の作品について、その独自性と 20 世紀後半における声の作品の中での価値を探ることを目的とするものである。

第二次世界大戦終戦以降、現代音楽シーンにおいて人間の声の持つ新しい可能性へと作曲家の関心が向けられるようになった。従来のオペラや歌曲におけるテキストを声に乗せて歌うという基本的な概念が根本から覆され、様々な角度から音楽作品における声の持つ可能性が拡大されていったが、これらの一連の試みは戦後の現代音楽において大きな現象のひとつであったと言える。こうした欧米の作曲家らのアプローチ方法とは異なる切り口から声の作品の新しい可能性を引き出そうとしたのが湯浅譲二であると筆者は考えた。そこで本研究では、テープ作品《ヴォイセス・カミング Voices Coming》(1969)、混声合唱組曲《問い Questions》(1971)、9 人以上のパフォーマーのための《演奏詩・呼びかわし Performing Poem Calling Together》(1973)、バリトンとトランペットのための《天気予報所見 Observations on Weather Forecasts》(1983)の 4 作品を採り上げ、これらの作品の中で言語コミュニケーションにおけるどのような側面が浮き彫りにされるのかという問題について作品分析を通して探った上で、20 世紀後半における欧米の声の諸作品と異なる点を明確にし、最終的に湯浅作品の価値を論じていく。

本研究は 4 章から成る。第 1 章では、まず 20 世紀後半における声を含む作品について欧米の作品を中心に概観し、テキストの意味内容を剥奪する試み、声を音響素材の一部として扱う電子的技術による試み、また身体的なパフォーマンスとして人間の声を扱う試みといった様々な角度から声の作品の可能性が拡大されていく流れを整理した。これらの諸作品では響きをどのように「認識」させるかという点が主たる問題とされていたのに対し、

湯浅作品では声を単なるひとつの響きとして捉えるのではなく、声を出すという「行為」そのものに重きが置かれているという点が最大の特徴であると言える。また音楽とコミュニケーションとの関わりという点から見ると、これまでの作品では音楽の基本的機能がそこでのコミュニケーションであるという見地から作曲されていたのに対し、湯浅作品では言語コミュニケーションそのものへの問いかけがおこなわれたという点が大きな特徴である。その後、湯浅に関する先行研究として柿沼(1984)、Kushida(1998)、Holter(2008)、植野(2009)を挙げ、各論考の特徴をまとめた結果、Kushida、Holter、植野に共通するのが湯浅作品を「能」との関わりや「日本的」なものといった解釈から捉えている点であることが明らかになった。湯浅作品を論じていく上で日本的な要素との関わりという側面からの考察はひとつの指標となるが、その一方でこうした解釈からだけでは湯浅作品の本質を論じ切れない。そこで本研究では、湯浅作品を言語コミュニケーションに含まれる問題との関わりという別の見地から論じていく。

続く第2章においては、まず湯浅の声を編成に含む作品を概観し、本研究で採り上げる作品群の位置付けを探った結果、これらの作品群ではメタ的視点から声と言語が捉えられているという点において、湯浅の声の作品全体の中だけでなく20世紀後半における声の作品の中でもとりわけ独創的であり、分析研究として採り上げる価値が最も高い作品群であることが明らかになった。続いて湯浅の音楽観の中で声とコミュニケーションとがどのように捉えられていたかについて考察した。湯浅は声の問題に取り組むにあたって、従来の歌曲やオペラといった方法によってではなく、日常生活におけるコミュニケーションにより近い自然な形態によって声を扱うことの重要性を認識していた。そのための表現手段として、話し言葉におけるパラ言語情報の問題や、文化人類学的視点から言語コミュニケーションに関わる距離と空間といった問題に着目したという点に湯浅独自の視点が表れていることが明らかになった。続いて次章における作品分析にあたっての方法として、音楽的・音響的要素および音楽のディスコース、そして言語の問題に関わる諸要素との主に2つの観点から分析をおこなっていくことを論じた。

第3章では、湯浅の言語コミュニケーションに関わる4作品について楽曲分析を行っていき、言語コミュニケーションにおけるどのような側面が浮かび上がるのかという点について探った結果、まず《ヴォイセス・カミング》では第1曲から第3曲にかけて、電話通信における電話交換手と利用者の声、湯浅と友人の会話の中から切り取られたフィラーの部分の声、政治家の演説の中の声という3つの場面における声がそれぞれ音響素材として

用いられているが、誰の声であっても話し言葉が音楽的に捉えられているという点が大きな特徴であることが明確になった。そして素材の綿密な配置によって、話し言葉における声色、抑揚、音高、スピード、身振り、表情といったパラ言語的側面が浮き彫りになることが明らかになった。

《問い》ではジェンダーやスピーチレベルといった言語の問題に関わる要素に基づいてテキストが整理された上で配置されることによって、問いと答えとの関係性が浮き彫りとなるよう綿密にコントロールされていることが明らかになった。その結果、問いと答えとの間に意図的にコミュニケーション不全の状態が作り出されると同時に、第1曲から第6曲へと組曲が進むにつれ、ディスコミュニケーションの領域が徐々に拡張されていく流れが作り出されていることが明確になった。

続く《呼びかわし》における最も大きな特徴は、言語の問題に関わる要素として空間と距離が利用されている点にある。曲中では奏者の発話に際して想定される具体的な距離が設定されるが、分析の結果、この距離の指定とは奏者の発話におけるパラ言語的側面を浮かび上がらせるための一種の「仕掛け」であるということが明らかになった。

《天気予報所見》では、パラ言語的要素の中でもこれまでの3作品においてクローズアップされることがなかった笑いや泣きといった感情表出としての要素が作曲の構成要素としてフル活用されている点が最も大きな特徴である。分析の結果、情報伝達を最大の目的とする天気予報の言葉を用いたテキストに対して、その意味内容と関連付けられない感情表出やジェスチャーといったノンヴァーバルな要素とがあえてちぐはぐに組み合わせられることによって、天気予報の言葉そのもの、また情報伝達を目的とした言語コミュニケーションそのものが異化されていることが明確になった。

第4章においては前章での分析結果をふまえた上で、言語コミュニケーション的観点から作品群全体を通して浮かび上がる特徴を整理した結果、まず湯浅作品では言語コミュニケーションにおけるありとあらゆる側面が扱われているということが明らかになった。作曲家が音楽的・音響的要素に基づいて作曲するのと同様に、言語に関わる様々な諸要素に基づいて言葉を論理的に捉えた上で曲を構成したという点に湯浅の独自性が表れていると言える。またいずれの作品においても、そこで使われる言葉の特徴や個別性が的確に把握された上で綿密に配置されていることが明らかになった。それから《天気予報所見》を除く3作品では、空間上でそれぞれの言葉が互いに響き合うという点から見て、一種の交響的言語空間が形成されるという点が明確になった。それからいずれの作品においても、言

語コミュニケーションそのものが異化されていることが理解できた。曲によって方法やプロセスが異なるものの、曲中で構成要素として使用される言語の問題に関わる諸要素とは、言語コミュニケーションそのものを異化するための一種の仕掛けであることが明らかになった。そして現実世界における言語コミュニケーションとは異なる仮想的言語コミュニケーション空間を聴き手に実際に体験させることによって、言語コミュニケーションとは一体何なのかという批判的問いかけが投げかけられていることが明確になった。

そして最後に、本研究を通して導き出された湯浅譲二の言語コミュニケーションの問題に関わる声の作品群の独自性を論じた上で、20世紀後半における声の作品の中で湯浅作品がどのような芸術的価値を持つのかについて論じていった。人の声やその響きを素材として捉え、テクノロジーの発展としての声の可能性が追求されていた20世紀後半における声の作品に対し、湯浅作品では声を出すという行為そのものに焦点が当てられており、その言語行為を通して湯浅は言語コミュニケーションとは何かという問題を改めて問い直しているのである。言語コミュニケーションそのものを「主題化」し、メタ的視点から捉えているという点から、湯浅作品は20世紀後半における声の諸作品の中で独自の立ち位置を占めていると言える。湯浅の独自性とは、声の作品を作曲していく上で言語コミュニケーションそのものをメタ的視点から捉え直し、その役割を声に担わせるという新しい切り口を見出した点にある。さらにこの独自の切り口を手がかりに、新たな声の作品を作曲していくことが可能である。そういった意味において、湯浅の言語コミュニケーションを主題化した声の作品群は、声を用いた作品の新しい地平を開いたと言える。

本研究を通して、20世紀後半における他の作曲家による試みとも、従来のテキストの音楽化とも異なる独自の視点から声を捉え、ノンヴァーバルコミュニケーションやパラ言語的側面、ディスコミュニケーションといった独自の切り口から言語コミュニケーションに含まれる全ての側面を音楽作品として再構成し、声の新しい役割と可能性を引き出したという点に湯浅作品の芸術的価値があるということが明確になった。言葉や声を発するという言語的・社会的行為の音楽的再構成を通して、発話言語に含まれる全ての側面を浮かび上がらせ、言語コミュニケーションとは一体何なのかという問題提起を音楽家の立場から聴き手に投げかけたのが湯浅の言語コミュニケーションを主題化した声の作品であると結論付けた。このように考えると湯浅作品は、言語を用いた音楽作品としては従来の声楽作品のスコープを超えたものであり、20世紀後半の音楽史に対して多大な貢献をしたと言えるのである。